

明治四十四年に出版された『思ひ出』には旧い柳川の水と柳の情調が全巻にあふれていて、それは夢幻的でさえある。しかも舟でゆく柳川の水路には、今も『思ひ出』の夢幻の世界が随所に名残りをとどめていて、旅の人の心をやわらかく包んでくれるものがある。北原白秋は亡くなる直前の著書である『水の構図』に書いている。

「まことに筑後こそは私の生国であり、柳川こそはまた私の産土である。この私の詩の母体柳川、この空、この光、この土、さらにまたこの水の色と香りと温度と輝きこそは、幼き日の私を慈しみ育て上げた」

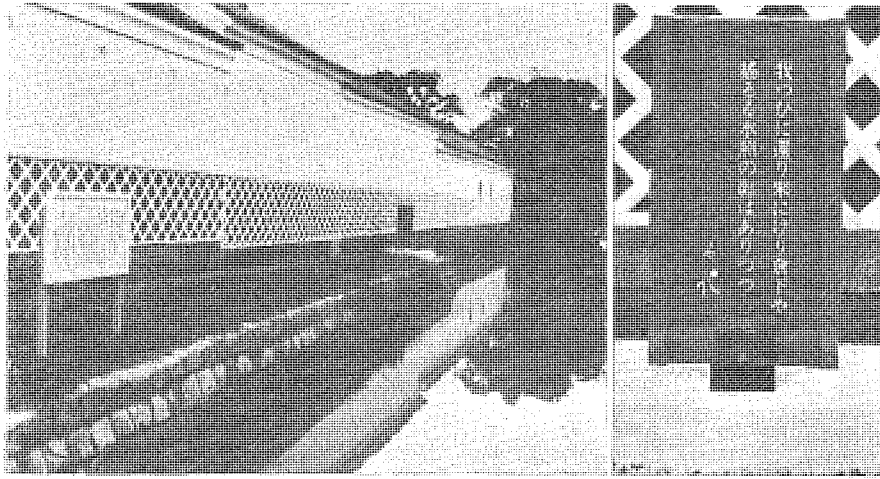
柳川は白秋の出身地であるというだけではない。柳川は近代の生んだ偉大な詩人の「詩の母体」なのである。柳川と白秋とは切っても切れない深いえにしで結ばれているのである。

このことを最もよく理解し、主唱しているのは柳川ロータリークラブであるかもしれない。すなわち、昭和四十四年十一月に白秋生家が復元されると、それと前後して、元三七〇地区ガバナリーである柳川の立花和雄氏が発売元となって『思ひ出』が復刻出版された。これは古書店でも手に入らない稀覯本とされていたのだが、詩人野田宇太郎氏の肝入りで「柳川版」として再刻したものである。

## 柳川の「水影の碑」

小倉 浜田 陸一

筑後柳川は北原白秋を生んだ町として知られている。こんにち、柳川市が名物の川下り観光で賑わっているのも、ひとえに白秋の詩集『思ひ出』のイメージのおかげである。



次いで昭和四十五年四月には柳川ロータリークラブは創立十周年の記念事業として、これも絶版久しく、幻の書とされていた『水の

構図』を復刊した。これは白秋の詩歌と、門下の田中善徳の写真とから成る本だが、偶然にも三十年前のフィルムが発見されたために、原本同様の造本に成功した。古い水郷の風情をつたえる美しい本である。

さらに、白秋頭影の美挙として称讃をうけたのが、昨年五月に建設された「水影の碑」である。柳川ロータリークラブでは『水の構図』の出版によって若干の利益をあげたが、これは白秋の著書販売によるものであるから、クラブが私すべきでなく、白秋のために使用しようということになった。このようにして柳川ロータリークラブ創立十五周年記念事業として計画されたのが「水影の碑」である。

柳川には白秋碑としては「帰去来」の碑のほか、「立秋」の碑、「水の構図」の碑があるが、いずれも詩や文章によるもので、まだ歌碑はない。柳川の水辺に、水にゆかりのある白秋の歌碑を建てるというのは、柳川に有縁の野田宇太郎氏のかねてからの示唆でもあった。

選ばれたのはふるさとを愛慕する思い深かった白秋が二十年ぶりの昭和三年に帰郷したときの感情を詠った歌である。

我つひに還り来にけり倉下や

揺るる水照の影はありつつ 白秋

設計は芸術院会員の谷口吉郎氏(東京西)である。谷口氏は近代建築の権威であるとともに、信州馬籠の島崎藤村記念館をはじめ、徳田秋声碑、室生犀星碑、木下杢太郎碑、火野葦平碑などのほか、多くの文学者の記念碑を設計されている。

場所は白秋生家に近い沖の端である。有名な「お花」の長い白壁を背景に、瀟洒とも清楚とも、あるいは艶麗とも感じられる碑である。高さ一・四メートルのスウェーデン産の磨き赤大理石に、明朝活字体で歌を二行に彫り、台石は白い稲田石である。クイーン・レッドという赤の碑の前に、函形の黒い磨き大理石を置いて、その中には柳川版の『思ひ出』一巻が納められている。

白のなまこ壁の前に、赤と白と黒で形成された碑が水に影を落す風景は、いかにも美しい。柳川に名物がひとつ増したという感じである。この碑にかぎっては、白秋歌碑といわずに「水影の碑」と呼びたいと柳川クラブでは語っている。それにしても、十周年事業といい、十五周年事業といい、ふるさととの詩人を敬愛する柳川ロータリークラブの高い文化性には敬服するばかりである。

(福岡県・福地製造及販売)